

ナラティブ・コンピテンス（物語能力）に注目した医学教育

文学を通じた医学教育の「実践」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 総合内科学
小比賀 美香子

実践の背景

17世紀にデカルトは、人間を、「身体（科学の研究対象）」、「心あるいは魂（哲学と宗教の研究対象）」に分けて考えることを提唱した。この「心身二元論」により、現代医療は発展したとされるが、一方で身体的な異常に焦点を当てた結果、患者の人間の側面は軽視されやすい傾向となったといわれる。アーサー・クラインマンは、「病いの語り」において、医療者は疾患（Disease）として扱う事象を、患者は病い（Illness）として生きるという見方を提唱した。つまり、同じ事態に対してそれぞれが異なる物語を持っており、それらのいずれもが医療にとって重要であるが、現在の医学教育は疾患（Disease）へのアプローチが中心である。また、医療はサイエンスとアートから成るとされるが、現在の臨床、医学教育においては、サイエンスがより重視される傾向にある。サイエンスによるエビデンスを重視した標準的治療は今後も重要ではあるが、アートによる個別のアプローチ、癒しについても発展が望まれる。アートによるアプローチのひとつであるナラティブ・メディスンは、「病いのストーリーを認識し、吸収し、解釈し、それに心動かされて行動するというナラティブ・コンピテンス（物語能力）を用いて実践する医療」と定義される。リタ・シャロンは、物語能力を医師がもつべき基本的能力として、その育成のための教育手法を開発した。ナラティブ・メディスンの主要概念は、Attention（注目・配慮）、Representation（表現）、Affiliation（関係構築・つながり）の3つであり、物語能力の教育における3本柱となる。

実践の目的・内容

岡山大学総合内科では平成29年度より、学生実習に、物語能力涵養のための医学生向けのトレーニングを取り入れている。実践の目的は、医学生の物語能力向上であり、総合内科での選択臨床実習中の（基本実習を終えた5-6年生2-4名、4週間）医学生を対象に、「ナラティブトレーニング合同実習」「パラレルチャート」を実施する。「ナラティブトレーニング合同実習」では、薬学部学生も一緒に、2週にわたり計4時間の実習を行う。1週目では題材として写真や絵画を用い、作文を書きグループ内で共有する。2週目にはシナリオとして小説や詩を用い、作文を書いてグループ内で共有する。「パラレルチャート」では、4週間にわたり担当患者さんについて、患者さんの気持ちや自分の気持ちについて文章で表現し、1週間に1回教官がフィードバックを行う。参加人数は平成29年度10人、平成30年度24人、実施回数は平成29年度5回、平成30年度7回で、実習終了後にアンケートを実施した。

実践の結果

「ナラティブトレーニング合同実習」では、写真や絵画、文学作品に「注目」する時間をとり、文章として自由に「表現」した結果、物語や詩を書くなど、それぞれが多様に表現することができた。アンケート結果では、ナラティブの意味については概ね分かったという結果だった。良かった点の抜粋では、自分の気持ちや内面に目を向ける機会は少ないが、その機会を得ることができた、などが挙げられた。改善点として、難しかった、時間が足りなかった、あるいは長かったという指摘があった。感想では、普段病棟では患者さんの話を聞いてばかりなので、自分も誰かに話す必要があると感じた、といったようなコメントがあった。

「パラレルチャート」では、学生によってその記載は様々であったが、患者さんの背景や立場について考え記載する学生、また自分自身の内面までふり返り、詳細に記載する学生もいた。アンケート結果では、医師になってからの診療に役立ちそうですか？という質問では、多くが大変役立つか役立つで、理由として「普通のカルテのみだと、自分の気持ちや患者さんの気持ちをついつい忘れてしまいがちだが、一度言語化することで強く印象に残り、無機質な医療が人間味のあるものになると思う。」というコメントもあった。感想では、注目すべきものとして、書くことでストレスが減った、傷ついた自分に気づいた、などがあった。

考察（まとめ・課題）

本実践は、これまで報告のあった類似の教育実践と比較し、他学部合同でより多様な視点に触れることがで

き、実際の担当患者さんとのやり取りを通して、自己をふり返り、省察することができ、実習中の学生の心理的ケアにもつながるといった特徴があった。課題として評価方法、指導者育成、消極的な学生への対応が考えられた。今後の展望として、「疾患 Disease」中心の卒前教育において、「病い Illness」の視点を学ぶ機会を提供することができ、自己省察、ふり返りにもつながることから、臨床実習全体を通じての取り組みの効果も期待される。また、文学作品の「精密読解」など、人文学的トレーニングにおいて、専門家との連携がのぞまれる。

参考文献

セシル・G・ヘルマン,『ヘルマン医療人類学 Culture, Health and Illness』,辻内琢也/牛山美穂/鈴木勝巳/濱雄亮 訳,金剛出版,2018

アーサー・クライマン『病の語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』,江口重幸/五木田紳/上野豪志 訳,誠信書房,1996,

リタ・シャロン,『ナラティブ・メディスン—物語能力が医療を変える』,斎藤清二/岸本寛史/宮田靖志/山本和利 訳,医学書院,2011